L・マイヤー『音楽における情動と意味』での G・H・ミードの参照

—— 音楽意味論と「社会心理学」の一接点として

小寺 未知留 （立命館大学）

レナード・マイヤー Leonard B. Meyer（1918–2007）は、二〇世紀後半に活動した米国の音楽理論家であり、音楽美学や音楽心理学などの周辺分野でも業績を残した研究者である。その初著『音楽における情動と意味 Emotion and Meaning in Music』（1956）ではプラグマティズムの哲学が参照されており、そのことは音楽事典などを通して広く知られている。ブライアン・ミラーによる先行研究（Millar 2020, 2021）では、マイヤーがいかにチャールズ・サンダース・パースおよびモリス・コーエンの記号論を（誤読を伴いつつ）参照しているのかが詳細に議論されている。しかしながら、ミラーの研究では、マイヤーが参照した重要なプラグマティストのうちの一人、ジョージ・ハーバート・ミード George Harbert Mead（1863–1931）からの影響については十分に論じられていない。また、他の先行研究にもマイヤーによるミードの参照を詳しく検証したものは見当たらない。

そのため、本発表では、いかに『音楽における情動と意味』のなかでミードの主著『精神・自我・社会——社会的行動主義者の立場から Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist』（1934、チャールズ・モリス編）が参照され、マイヤーの音楽論に組み込まれているのかを、(1)『音楽における情動と意味』でのミードへの言及箇所を『精神・自我・社会』と照らし合わせ、また（2)『音楽における情動と意味』を、そのもととなったマイヤーの博士論文（1954、シカゴ大学図書館アーカイヴ「レナード・マイヤー・ペーパーズ」所蔵）と比較することで検証する。加えて、(3) マイヤーのキャリア全体におけるミード受容の位置付け、また、音楽心理学の研究史におけるマイヤーのミード受容の位置付けについても整理・考察を試みる。これらの検証作業を通して、(a) マイヤーが、音楽的意味の客観性やそれに基づくコミュニケーションを論じる上で、『精神・自我・社会』をひとつの立脚点にしていること、(b) 博士論文におけるミードへの言及箇所が公刊版では削除・修正（その大部分はおそらく紙幅の削減や重複の解消を意図したもの）されており、結果的に、「社会心理学」という語が公刊版から姿を消したこと、(c) マイヤーの音楽論におけるコミュニケーションについての理論的基盤が、ミードの社会心理学から情報理論へと移行したこと、(d) マイヤーによるミードの参照が、音楽心理学の研究史においてしばしば着目される認知心理学ではなく、認知心理学が隆盛する以前の社会的行動主義の心理学の系譜にあること、という四つの点を指摘する。

これら四点は、先行研究では指摘・記述されてこなかったマイヤーの音楽論の一側面や音楽意味論と社会心理学との研究史上の一接点を提示するものであり、ひいては、二〇世紀後半の米国で提示された音楽意味論に理論的基盤を（一時的であれ）提供した思想的背景を再確認するものである。